

「ノラ・マクシェイン (“Norah M'Shane”)」について

井 上 清 子

On “Norah M'Shane”

Kiyoko Inoue

「ノラ・マクシェイン (“Norah M'Shane”)」は、イングランドの詩人イライザ・クック (Eliza Cook, 1818-89) によって書かれ、故国アイルランドとそこに残してきた恋人を偲ぶ移民の若者の心情を語っている。クックは、十代の終り頃その詩才を認められ、生涯にわたって女流詩人として比較的高い評価を受け続けた。彼女は多様なテーマで詩作を行い、その数編が代表作とされるが、「ノラ・マクシェイン」はそれに該当しないものである。

しかし現実には、それは、クックの詩集に繰り返し掲載される一方で、イギリスやアメリカ、更にはオーストラリアなどにおいて、ブロードサイド・バラッド (broadside ballad) やシート・ミュージック (sheet music) として、これも繰り返し印刷・出版が行われている。

「ノラ・マクシェイン」が書かれたのは、アイルランドからイギリスやアメリカに向かう移民の数が急増し、彼らを迎え入れる側の社会に、不安や緊張が高まりつつある時代であった。それ故か、アイルランド人移民をテーマとするその詩は、詩人の手を離れて独り歩きを始める中で、人々に個々の文脈に応じた感慨を抱かせ、また解釈を行わせたと思われる。

I

イライザ・クックは、1818年ロンドンのサザーク (Southwark) で、11人兄妹の末子と

して出生している¹。父親は真鍮職人 (brazier) であったと思われるが、子供の教育に熱心でなく、学校教育を施すことをあまり考えなかったとされる。クックも、日曜学校に通った以外は自学自習で読み書きを学んだ。

彼女は幼い頃から聡明であり、特に想像力が豊かであった。母親はクックの個性を認め、それに理解を示した。故に、クックの成長に大きな影響を与え、後年クックに、母をテーマとする詩を何編も書かせることになった。クックが9歳の時父親は仕事から引退し、暫く住居をサセックス州ホーシャム (Horsham, Sussex) 近郊の小さな農場に移した。その折の数年にわたる静かな田園での生活が、クックに十分な読書の時間を与え、その詩才を育むのに役立ったようである。

クックは、「直観的な衝動 (intuitive impulse)」によって詩作を始めた。それは、1833年もしくは1834年頃と考えられるが、一時期、母の死によって中断されている。その後、彼女は再び詩作を始め、その傍らイングランドの著名な詩人の作品を丹念に読み、それらから多くのことを学んだ。

1835年即ち17歳で、早くもクックは、最初の詩集 (*Lays of a Wild Harp: a Collection of Metrical Pieces*) を出版している。この詩集が好評であったことがクックに自信を与え、詩人として立つことを決意させた。彼女は1836年から、最初C、後にE.C.というイニシャルだ

けの匿名で、自作を幾つかの雑誌や新聞に投稿するようになった。

それらの詩は、編集者達に高く評価され、紙上に掲載されると、読者からも好評をもって迎えられた。最終的にクックの詩は、週刊新聞『ウィークリー・ディスパッチ (Weekly Dispatch)』が独占的に掲載することになるが、彼女は1837年、読者の求めに応じて同紙で本名を公表している。以降、クックの代表的な作品は、殆ど総てが同紙を通して発表された。

1838年、クックは2番目の詩集 (*Melania and Other Poems*) を出版した。美しい挿し絵が添えられたその詩集は、イングランドのみならずアメリカでも成功を収め、詩人としてのクックの地位を確定させた。因みに、前掲の「ノラ・マクシェイン」は同詩集に初めて掲載されている。

1848-53年に詩集全4巻を出版する一方で、クックは1849年5月から、自身の編集する週刊誌『イライザ・クック・ジャーナル (*Eliza Cook's Journal*)』の刊行を開始し、それを1854年11月第291号まで続けた。同誌は、イングランドの中産階級の感性、思考様式、生活習慣などを伝えるものとして、相当な購読者を獲得した。更にクックは、1860年には当該の週刊誌の総集編 (*Jottings from My Journal*) を出版している。

クックは、その生涯の大半をヴィクトリア時代のロンドンで過ごし、約475編の詩を書いた。そして7度詩集の出版を行っている²。そのうち、彼女の円熟期、即ち1860年代の詩集は、イギリスとアメリカで出版された。それらの詩のテーマの中心を占めているのは、自身の日常生活や周囲の自然に着想を得たものである。しかし同時に、当時のイギリスの、内外における発展に伴って流入する異文化との接触の中で、クックは、海上に乗り出す航海者とその生活、大西洋の兩岸に急増し始めていたアイルランド人移住者と彼らの故国アイルランド、アメリカから伝えられる先住アメリカ人や黒人奴隷の悲劇、加えて後者を告発すべく書かれ、1852年に出版されて、奴隷解放の遠因にもなったとされる『アンクル・トムの小屋 (*Uncle Tom's Cabin*)』などに関連するテーマでも、

何編もの詩作を行っている³。

クックの詩の本質は、自身に本来的に備わっている感性に従い、流出する感情や思考をそのまま、技巧を用いず素朴な言葉で表現するところにあるとされる。彼女は、詩句をひとたび文字として留めると、それに推敲の手を加えることが殆どなかったようである。従って、その詩は平易で読みやすく、同時に強く人々の心に訴えるものを持っていた。故にそれらは、当時の中産階級及び労働者階級の間で好まれた。事実彼女の詩の多くが、自身の詩集のみならず、ブロードサイド・バラッドやシート・ミュージックといった形でも、広く民間に流布されることとなっている⁴。

クックは、1860年代の終り頃から、健康の衰えと共に徐々に詩作からも遠ざかるようになった。そして1870年には、それまでの全作品を掲載する形で『イライザ・クック詩集 (*The Poetical Works of Eliza Cook*)』を刊行している。クックは、1889年ロンドン近郊のウィンブルドン (Wimbledon) で死去したが、生前に彼女の詩はドイツ語やフランス語にも翻訳され、国外でも賞賛された。

II

「ノラ・マクシェイン」は、8行連句3連 (stanza) の比較的短い詩であるが、行末で1行おきに正確に脚韻 (rhyme) を踏ませ、整った形で書かれている。そして、概ね各連前半部において、異郷に在る今、若者の心に浮かぶ思い出の日々が語られ、各連の後半部で、恋人への強い思慕と絶ち難い望郷の念が繰り返し歌われている。

「若者は、財を得て豊かになるべく、故郷を後に長旅を続け、大海原を越える。しかし、異郷の人は冷淡で彼は孤独であり、この上なく我が身が惨めに思える (I've left Ballymornach a long way behind me./To better my fortune I've cross'd the big sea;/But I'm sadly alone, not a creature to mind me./And, faith! I'm as wretched as wretched can be. [stanza 1: ll. 1-4])」。

「彼は、雛菊のように爽やかなバターミルクを思い、美しい丘、緑の野を思う (I think of

the buttermilk, fresh as a daisy./The beautiful hills and the emerald plain;— [stanza 1: ll. 5-6]]。

「あの頃は、裸足で仕事から戻ると、泥炭が赤々と燃えていた。そしてその傍らで、稼いだ金を空中に放り上げたり、『アイルランドよ、永遠なれ』を口笛で吹いたりした (I sigh for the turf-pile, so cheerfully burning./ When barefoot I trudg'd it from toiling afar;/ When I toss'd in the light the thirteen I'd been earning./And whistled the anthem of "Erin go bragh." [stanza 2: ll. 1-4])。

「生まれ育ったのは、泥壁に草葺き屋根の小屋。そして、毎朝耳にした豚の鳴き声も、錆びた掛け金をはずす音も、今は総てが懐かしい (Oh! there's something so dear in the cot I was born in./Though the walls are but mud and the roof is but thatch./How familiar the grunt of the pigs in the morning./What music in lifting the rusty old latch! [stanza 3: ll. 1-4])。

「若者は、故国に残してきた黒い瞳のいたずら娘ノラ・マクシェインのことを思うと心が乱れる (And oh! don't I oftentimes think myself crazy./About that young black-eyed rogue, Norah M'Shane. [stanza 1: ll. 7-8])。

「故郷とノラに別れを告げて以来、幸せなことなど一度もなかったのだから (For I've never been happy at all since I parted/ From sweet Ballymornach and Norah M'Shane. [stanza 2: ll. 7-8])。

「確かにあの頃は金もなく、ポケットは軽かった。けれど、心には悲しみも悩みもなかったものだ ('Tis true I'd no money, but then I'd no sorrow./My pockets were light, but my heart had no pain, [stanza 3: ll. 5-6])。

「若者は、傷心の今、故国と恋人の許に帰らなければならないと思う (In truth, I believe that I'm half broken-hearted./ To my country and love I must get back again; [stanza 2: ll. 5-6])。

「そして、明日太陽が上るまで命があれば、懐かしいアイルランドとノラの許に旅立とうと決心する (And if I but live till the sun shines to-morrow,/I'll be off to old Ireland and Norah

M'Shane. [stanza 3: ll.7-8])。』

「ノラ・マクシェイン」は、恐らくクックが20歳になるより以前に書かれたと思われる、前述のように1838年出版の詩集が初出である。クックはこの詩において、アイルランドの地名「バリモナ (Ballymornach)」やアイルランド人女性によく見られる名「ノラ」を呈示することによって、内容に迫真性を持たせる。そしてこれもまた、アイルランドやアイルランドの人々に関して、当時のバラッドや歌謡によく用いられた固有のイメージ、即ち「雛菊の花 (daisy)」「バターミルク (buttermilk)」「エメラルド (emerald)」「『アイルランドよ、永遠なれ』の歌 (Erin go bragh)」「泥壁に草葺き屋根の小屋 (the cot...the walls are but mud, the roof is but thatch)」「豚の鳴き声 (grunt of the pigs)」などを詩句に多用する⁵。

クックの表現は、むしろ凡庸でステレオタイプののであるが、それは逆説的に、読む者に、アイルランドやアイルランドの人々に対する伝統的で固有のイメージを抱かせる。そして、美しい故国、貧しくはあったが幸せな日々への思慕が強烈である分、若者の、恐らくはアメリカと思われるが、異国における現在の孤独と惨めさは尚更に大きく、耐え難いものとなる。クックは、平易な語とステレオタイプの表現を用いながら、過去と現在、故国と異郷といった明と暗を巧みに描き出している。

そういった情景を踏まえて、この詩全体に生命力と躍動感を与えているのは、ノラが「黒い瞳のいたずら娘 (young black-eyed rogue)」であるという「事実」である。ノラは、恋人に忠実で従順な娘などではなく、時には彼の手にすら負えないいたずら娘である。その黒い瞳は、ノラの意志の強さと大胆な行動力を示すかのように輝いているであろう。その詩においてクックは、女性に対してまだ因襲的であったヴィクトリア時代に、ノラ・マクシェインという、近代を先取りするような個性を創造したと言えるのである⁶。

III

「ノラ・マクシェイン」は、発表以降、クッ

クの後続の詩集に転載されていくが、同時に、イギリスやアメリカなどにおいて、ブロードサイド・バラッドやシート・ミュージックとして印刷・出版されている。そして、多くの人々の間に一当時一般的には詩集などを購読しないと思われる層の人々をも含めて一広く流布された。それらに関して、現在知りうる限りにおける「ノラ・マクシェイン」の出版状況は、以下の通りである⁷。

(A)ブロードサイド・バラッドとして

ブロードサイド・バラッドは、「用紙の片面に印刷された、バラッド即ち物語歌謡、もしくは詩」と定義される⁸。この様式の出版は、安価な印刷術の発明によって、イギリスだけでなくオランダ、フランス、イタリア、スペイン、ドイツなどヨーロッパ諸国にも普及した。作者名や出版年度は殆どの場合記載されておらず、出版元すら不詳の例も多い。

ブロードサイド・バラッドの詞句は、本来歌われたものと思われるが、紙面に旋律は掲載されていない。作者は、人々によく知られた既存の旋律を念頭に作詞を行ったようであり、そのバラッドが歌われるべき旋律名が、タイトルの下などに指示されていることがある。

イギリスでは、16-19世紀にブロードサイド・バラッドの印刷・出版が行われた。そして、庶民の束の間の娯楽として、伝統的に1枚1ペニー(小型のものは半ペニー)で販売され、消耗品に近い存在であった。従って、それらは大量に販売され、民間に流布されたと思われるが、現存するものは僅かである。典型的なブロードサイド・バラッドは、ロンドンなど都市で印刷され、その最盛期は16世紀中頃から17世紀、次いで19世紀であった。アイルランドでは、18世紀からゲール語に代えて英語でバラッドが作られるようになり、ブロードサイド・バラッドは多くが19世紀の出版である⁹。

17世紀以降、イギリス、主にイングランドのブロードサイド・バラッドは、口承のバラッドと共に、植民者や移住者によってアメリカに持ち込まれ、地元でもそれらの再版が行われるようになった。更に18・19世紀には、イングランドのバラッド印刷業者が、ブロードサイ

ド・バラッドをアメリカに輸出するようになり、併せてアメリカの業者も、ブロードサイド・バラッドの印刷・出版を開始している。

アメリカでは、南北戦争(1861-65年)以前にブロードサイド・バラッドの地位が確立し、19世紀を通してその印刷・出版が行われた。19世紀のイギリス及びアメリカにおいて、口承のバラッド並びにブロードサイド・バラッドの普及に、アイルランド人移住者が果たした役割は大きい。彼らが、口承や印刷物の形で、多様なバラッドを移住先に持ち込み、流布させただけでなく、定住後それらに対する大きな需要を生み出したからである。

以下、イギリス並びにアメリカにおける「ノラ・マクシェイン」のブロードサイド・バラッドの版(version)の所蔵先、タイトル、印刷・出版業者、その営業年代を順に示し、加えて個々の版の特徴を述べる。

(a) イギリス

- (1) Bodleian Library, University of Oxford: Harding B 11 (2717), "Norah McSheen, Or I Am Leaving Ballimoney," Printer: J. Harkness, Preston (between 1840 and 1866).
- (2) Bodleian Library, University of Oxford: Firth c. 26 (16); 2806 c. 16 (130); and, Harding B 11 (3881), "Norah M'Shane," Printer: T. Pearson, Manchester (between 1850 and 1899).
- (3) Bodleian Library, University of Oxford: Harding B 11 (56), "Norah M'Shane," Printer: H. Disley, London (between 1860 and 1883).
- (4) Bodleian Library, University of Oxford: Harding B 11 (1814); and, 2806 b. 11 (10), "Norah M'Shane," Printer: H. Such, London (between 1863 and 1885).
- (5) Bodleian Library, University of Oxford: 2806 c. 15 (9/10); and, Harding B 26 (464), "Norah Mac Shane."

上掲ブロードサイド・バラッドの(1)-(4)の版に関して、クックの原詩に最も近いのは(3)

の版である。“oftentimes”を“often,”“turf-pile”を“turf,”“my heart”を“my head”に変える以外は、大きな変更を行っていない。(2)の版は、“And, faith!”を“Och, hone,”“Oh!”を“Och”とアイルランド訛り(brogue)に変えたり、読者に理解しやすいようにとの配慮であると思われるが、“anthem”を“old song,”“familiar”を“pleasant”に変えたりしている。しかしそれ以外は、数箇所の微少な変更を除き、クックの原詩をほぼ正確に転載している。(4)の版は、(2)の版で述べた3点について同様の変更を行っており、これら以外にも数箇所微少な変更が見られるが、クックの原詩に極めて近い。

対して(1)の版は、クックの原詩に「バリマニ(Ballimoney)を後にして」というサブタイトルが付けられ、「ノラ」の姓の綴りの“M'Shane”を“McSheen”に変えているだけでなく、若者の出身地の地名“Ballymornach”も“Ballimoney”に変更されている。更に詞句に関しても、“big sea”を“deep sea,”“And, faith!”を“I own,”“anthem”を“song,”“my heart”を“my head”に—この変更は(3)の版にも見られるが、変えているなど、原詩と異なる箇所が相当数見出される。この版は、恐らくはバラッド業者が、原詩よりはむしろそのブロードサイド・バラッドの版を、それも文字を通してでなく、読み上げられるのを聞きながら組版したもののように思われる。“as a daisy”が“from the dairy,”“so cheerfully”が“I saw cheerfully,”“In truth”が“It is true”などと表記されている箇所が散見されるからである。

ただ興味深いのは、クックが記した「バリモナ(Ballymonarch)」という地名が架空のものと思われるのに対して、この版が挙げている「バリマニ(Ballimoney)」は、(綴りはBallimoneyであるが)北アイルランドのアルスター地方アントリム州(Co. Antrim, Ulster)に実在する点である¹⁰。この版の版元の姓である「ハークネス(Harkness)」も、ルーツはスコットランドであるが、17世紀以降アルスター地方に定着し、今日もよく見られるようであり¹¹、この版と北アイルランドとの何らかの関連も考えられる。

(5)の版は、(1)と(2)の版が、「ノラ・マクシェイン」の筋とは無関係な挿し絵を掲載し、また(3)と(4)の版が挿し絵なしで出版されているのに対し、恋人と思われる若い男女の挿し絵を冒頭に掲載している。その意味においても興味深い版であるが、判読が不可能であり、原詩との比較は今後の課題としたい。この版は、出版業者、出版年代共に紙面に記載がなく不明であるが、(1)–(4)の版がイングランドで印刷・出版されているのに対し、アイルランドの版元から出版された可能性が高い¹²。

(b) アメリカ

アメリカで出版され、現在入手可能な版は1版のみである。即ち、

Library of Congress: American Song Sheets, Series 1, Volume 6, “Norah M'Shane,” Printer: Andrews, New York.

この版は、クックの原詩の“hills”を“halls,”“Young black-eyed”を“black-eyed,”“my heart”を“my head,”“old Ireland”を“dear Erin”に各々変更している以外は、原詩を殆どそのまま掲載している。判読可能なイギリスの版が総て、若者の故国を、クックの原詩のままアイルランドとしているのに対し、この版は「エリン(Erin)」としている。エリンは、アイルランドを女性として人格化する際に伝統的な呼称とされる¹³。新しい国アメリカにおいて、その語は、遠い異国、そして古来の歴史を持つアイルランドを、読者の心に鮮明に浮かび上がらせるのに効果的であると思われる。

版元のアンドルーズ(Andrews)は、1850年代にニューヨーク市で、ブロードサイド・バラッドを手広く印刷・出版していたようである¹⁴。

因みに、上掲のイギリス並びにアメリカの総てのブロードサイド・バラッドの版において、作者クックの名は記載されていない。

(B) シート・ミュージックとして

シート・ミュージックは、前述のブロードサイド・バラッドが、本来歌われるべきものであったのに反して、詞句を重視し旋律を除去し

ていったのに対抗して、生み出された様式とも言える。イギリスにおいて、17世紀末から18世紀にかけ、歌唱と楽器による伴奏に重点を置いた出版が行われるようになったのである¹⁵。以降イギリスでは、多数のシート・ミュージックが印刷・出版されたと思われる。

しかし、現在のところ同国では、18世紀以降のシート・ミュージックの状況に関してあまり研究が進んでいないようである。資料も、英国図書館(British Library)所蔵の収集品(collection)の一部が、電子情報化され公開されているものの、同図書館やスコットランド国立図書館、各大学図書館などに個々に所蔵されたままになっている。

対して、アメリカにおいては、建国以降の新しい民衆文化の流れの中で、多数のシート・ミュージックが印刷・出版され、各時代の世相を反映するものとして近年、議会図書館(Library of Congress)や各大学図書館の収集品に関する研究や、それらの電子情報化及び公開が、急速に進められている¹⁶。

19世紀初頭に、アメリカ東海岸の主要な都市の小さな印刷所で開始されたシート・ミュージックの出版は、アメリカ経済の拡張に伴い中産階級が増加する中で、同世紀末までに大規模な事業に成長した¹⁷。安価なブロードサイド・バラッドとは異なり、シート・ミュージックは、彫版印刷による楽譜を掲載する必要もあって、1枚もしくは2枚の二つ折り判紙(folio)が25セントと、当時としては高価であった。また、それを十分楽しむには、伴奏用にピアノやオルガンなどの楽器が必要であった。そのため、シート・ミュージックは、中産階級、後には比較的裕福な労働者階級をも含めた階層を対象に、出版が行われている。

しかし、そこに掲載された歌謡は、劇場、 minstrel show (minstrel show)¹⁸、寄席など至る所で歌われ、広く社会に流布された。またそれらの歌謡は、1部10セントと安価な歌集(songster)にも転載されて、大衆に向けても販売が行われている。

19世紀初頭にアメリカで活動していた脚本家、俳優、演奏家、作詞・作曲家の多くは、ヨーロッパを中心としてアメリカ国外の生まれで

あった。1820年代以降に活動を開始したアメリカ生まれの人々でさえ、イギリス系アメリカ人が主流であり、ヨーロッパ志向が強かった。従って、アメリカで音楽出版事業が確立した時、流通した商品の多くは、ヨーロッパからの輸入品かその海賊版であったとされる。

シート・ミュージックに関しても事情は同じであり、1840年までにアメリカで出版されたものの90パーセント、もしくはそれ以上が、イギリス起源であった。

以下、イギリス、アメリカ、及びオーストラリアにおける「ノラ・マクシェイン」のシート・ミュージックの版の所蔵先、タイトル、作曲者、印刷・出版業者、出版年度を順に示し、加えて個々の版の特徴を述べる。

(a) イギリス

- (1) British Library: H. 2830. (20.), "Norah McShane: Irish Ballad," Composed by J. Blewitt, Published by T.E. Purdy, London [1840?].
- (2) British Library: H. 1283. a. (14.), "Norah McShane Irish Ballad," Composed by Jonathan Blewitt, London: Brewer & Co. [1873].

(2)の版は、現在複写不可で詳細は不明である。しかし作曲者も同じであり、(1)の版の再版と思われる。(1)の版は、クックの原詩のタイトル "Norah M'Shane" を "Norah McShane" に変更し、「アイルランドのバラッド (Irish Ballad)」としている。シート・ミュージックにおいて、感傷的な歌謡の多くは「バラッド」と称されたようであり¹⁹、この版も出版業者が、原詩の内容を踏まえて一目で全体が分かるように、その語句を添えたと思われる。

(1)の版は1840年に出版されたようである。1840年代までにイギリス並びにアメリカにおいて、アイルランド歌謡 (Irish song)、即ちアイルランドとアイルランド人にまつわる大衆向けの歌謡は、中産階級家庭の居間や客間で、演奏されたり歌われたりするひとつのジャンル (popular parlor song) として定着したものになっており²⁰、この版も、その流れの中で出版

されたとと思われる。

(1)の版は、クックの原詩をほぼそのままの形で踏襲し、それに旋律を付けている。ただ、"my heart"を"my head," "old Ireland"を"dear Erin"と変更するなど、若干手を加えている。また歌唱の際の効果を考え、原詩第1連の最後の行 "About that young black-eyed rogue, Norah McShane" を "About that young black-eyed rogue Norah McShane/ Norah McShane, Norah McShane/ About that young black-eyed rogue, Norah McShane" とするなどの工夫を行っている。

作曲者のブルウィット (J. Blewitt, 1782-1853) は、イギリスで作曲家として活動し多くの作品を残している。しかし、その生涯、及びどのような経緯でクックの原詩に旋律を付けたかに関しては、現在のところ不明である²¹。

(b) アメリカ

- (1) Library of Congress: M 1. A 12 V Vol. 7, "Norah McShane A Ballad," Composed by Charles Horn Junr., New York: C.E. Horn, 1841.
- (2) Library of Congress: M 1. A 12 Z Vol. 6; Rare Book, Manuscript, and Special Collections Library, Duke University: Music # 144; and, The Lester S. Levy Collection of Sheet Music, Milton S. Eisenhower Library, The Johns Hopkins University: Box 128 Item 024, "Norah McShane Ballad," Sung by Mr. T. Bishop, Composed by W.J. Wetmore, New York: Firth, Pond & Co., 1850.

(1)の版は、クックの原詩のタイトル "Norah McShane" を "Norah McShane" に変更し、原詩の "old" をアイルランド訛りの "ould" とするなど若干手を加え、更に「バラッド」という語句を添えている。また、歌唱の際の効果を考え、各連最後の行を2回繰り返している。しかし、殆ど原詩を忠実に踏襲し、それに旋律を付けている。

作曲者であるホーン (Charles Edward Horn, 1786-1849) は、イングランドに1782年定住し

たドイツ人の家庭に生まれ、父親も音楽家であった²²。ホーンは、作曲家であると共に、俳優、歌手、指揮者としても活動し、一時期音楽関係の出版事業も行っている。彼は、1827年アメリカに移住しており、(1)の版は、クックの原詩に自身が旋律を付け、更に自ら出版している。恐らくホーンは、クックの詩集などを通してその詩を知り、アメリカでシート・ミュージックとしての出版を考えたのであろう。

(2)の版は、タイトルが(1)の版と同じく "Norah McShane" となっている以外は、クックの原詩をそのまま用いている。作曲者のウェットモア (W.J. Wetmore) は、アメリカの音楽家であると思われるが、詳細は不明である。

この版の出版元であるファース社 (Firth, Pond & Co.) は、ニューヨーク市において、1840年代後半にその社名で営業を開始している。1849年には、著名な作詞・作曲家であるフォスター (Stephen Foster) とも出版契約を結ぶなど、1860年代まで同市で大手の音楽出版業者であった。(2)の版に歌手名が記載されていることから、その版は何らかの形で、聴衆の前で歌われたものと思われる。

(c) オーストラリア

オーストラリアにおいて、出版されたことを知り得るシート・ミュージックの版は、現在1版のみである。即ち、

National Library of Australia: MUS Snell Nmb 784.5 S 942, "Norah McShane," Arranged by W.D. Sutch, Sydney: J.R. Clarke, Music Publisher (between 1859 and 1865).

この版は、作曲者でなく編曲者の名が記載されており、その詞句も、クックの原詩よりも、むしろ前述のイギリスで出版されたブロードサイド・バラッドの(2)の版に極めて近い。また、この版の編曲者であるサッチ (W.D. Sutch) も、オーストラリア、イギリス、アメリカにおいて、他の作品がこれまで見出せず、無名に近い存在であったように思われる²³。

従ってこの版は、過去にブロードサイド・バラッドの詞句に旋律を付けて出版された、シー

ト・ミュージックの版などを基に、印刷された可能性も考えられる。その故か、イギリス並びにアメリカで出版されたシート・ミュージックの版の総てが、作詞者であるイライザ・クックの名を明記しているのに対し、この版のみ無記名である。

因みに、オーストラリアにおける「ノラ・マクシェイン」の、ブロードサイド・バラッド並びにシート・ミュージックとしての出版状況は興味深く、今後の課題としたい。

「ノラ・マクシェイン」は、上述のようにクックの詩集以外に、ブロードサイド・バラッドやシート・ミュージックとして印刷・出版され、イギリス並びにアメリカに広く流布されるところとなった。概ねイギリスにおいてはブロードサイド・バラッドとしての出版が、アメリカにおいてはシート・ミュージックとしての出版が、中心であったと思われる。

そして、それらの形式は「ノラ・マクシェイン」を、詩人クックの一連の詩作の流れから切り離し、単独の作品として、時には作者の名も知られぬままに、独り歩きさせることを可能にした。即ちその詩は、1840年代以降両国において、流入し続けるアイルランド人移住者と、彼らを受け入れる地元社会という現実の中で、多くの人に読まれ、また歌われることになったのである。

IV

アイルランドは、1155年ローマ法皇ハドリアヌスIV世(Hadrian IV)が、イングランド国王ヘンリーII世(Henry II)に、アイルランドの支配を認めたことに端を発し、以降イングランドの侵略を受けることになった²⁴。

イングランドによるアイルランド植民は、16・17世紀に急速に進められ、最終的に1801年の「合同法(Act of Union)」によって、アイルランドはイギリスに併合されるに至っている。その間、1692年以降イギリス(イングランド)によって施行された「異教徒刑罰法(Penal Laws)」は、アイルランドにおいて多数を占めるカトリック教徒に多くの制約を科し、結果的にアイルランド経済を崩壊させる遠

因ともなった。

農業の後進性、比較的少数の大地主と多数の小作人という構図の土地制度などに加えて、アイルランドには、アルスター地方東部を除いて、産業革命の波が及ぶことがなかった²⁵。唯一の産業とも言えた家内工業的な繊維産業も、1820年代に急速に機械化の進んだイギリス繊維工業との競争に破れ、アイルランドでは多くの人が、貧しい生活を送ることを余儀なくされている。

そのような状況の下、イギリスにおいては1760年代に開始された産業革命以降、アメリカにおいては1783年の建国以降、拡張を続ける両国の経済が、雇用を求め生活の改善を図ろうとするアイルランドの人々を、移民として引き寄せることになった。更に、1820年代にはイギリスに向けて、1840年代にはアメリカに向けて、蒸気船による安価な渡航が可能となり、アイルランド人の出国に拍車がかげられた。

1845年の秋、ジャガイモの胴枯れ病に伴ってアイルランドを襲った大飢饉は、5年余に及んだ。そしてそれは、主食となるジャガイモの全滅が原因の、飢餓や伝染病の流行による夥しい数の死者を出した。併せてそれは、津波のような移民の群れを生み出すことになった。1845年に850万人を越えていたと推定されるアイルランドの人口は、1851年の国勢調査では、6,552,385人に激減している。

飢饉以前の移民は、経済的に比較的余裕があり、主に生活の改善が目的のプロテスタント教徒が多かったとされる。対して飢饉以後は、生存のためにアイルランドを出国する貧しいカトリック教徒が主流となった。

(A) イギリスとアイルランド人移民

飢饉以前は、イギリスが群を抜いてアイルランド人移民の主要な目的地であった²⁶。彼らにとってイギリスは、距離的にも近く、従来からイギリス農業の収穫期に、季節労働のために移住する伝統があったからである。また、何よりも1801年以降は、イギリスに向けての船出は、アイルランド人にとって国内の移動に過ぎなかった。アイルランド北部のアルスター諸州からはスコットランドに向けて、東部及び南部諸

州からはイングランドに向けて移住が行われている。

1830年代中頃には、イギリスの都市部に幾つかの恒久的なアイルランド人共同体 (community) が形成されている。特に、ロンドン、リバプール (Liverpool)、マンチェスター (Manchester)、グラスゴー (Glasgow) には、アイルランド人が多数定住しており、更にそこに移民が流入し続けた。中でもロンドンには、16世紀以降アイルランド人の定住共同体が存在し、1841年には、約75,000人のアイルランド (生まれの) 人が定住していた。それは、同年イギリス全体に居住していたアイルランド (生まれの) 人、約416,000人の18パーセントにあたる。

1700年から1800年に至るイギリス経済は、工業生産高がそれまでの4倍近くに、輸出が5倍に伸び、繁栄の時代を迎えたとされる²⁷。しかし18・19世紀は、多くの人にとって最も厳しい貧困の時代であった。ナポレオン戦争が主な原因となって、1790-1810年に生活費が2倍近くに上昇している。1815年、即ち同戦争終結の年に国会を通過した「穀物法 (Corn Law)」は、国外産の安価な穀物に高関税をかけることによって、穀物の高値を維持させ続けた。同法は、豊かな農民を保護するものとして、イギリス各地で、時に暴動を伴う抗議運動が展開されている。

加えて、1837-42年イギリスは不況に見舞われ、失業者が増大する中で主要な食料の価格が急上昇した。更に、1845年以降アイルランドの大飢饉に伴う貧しい移民の流入があり、イギリス社会は、救済税の負担増、雇用を求めている移民との競争や対立、移民の多くを占めるカトリック教徒に対する不信感などを経験することになった。

また、1830・40年代にはイギリス各地で、コレラ、発疹チフスなどの伝染病が流行し、多くの死者を出した。その原因は、流入するアイルランド人移民であると考えられ、彼らに対する激しい反感や敵意が生じている。

(B) アメリカとアイルランド人移民

アメリカに向けては、同国の独立以前からア

イルランド人の移住が行われていた²⁸。1717-76年の間に、約20-25万人のプロテスタント教徒が、アルスター諸州から、フィラデルフィア (Philadelphia) やニューヨークに向けて出国したことが知られている。

アメリカでは、独立以降も十分な国勢調査が行われておらず、推定であるが、1835年に約21,000人のアイルランド人が、移民としてアメリカに入国したとされる。1829年の「カトリック教徒解放 (Catholic Emancipation)」によって、カトリック教徒に対する制約が完全に解かれたことに加えて、1840年代から、北アメリカに向けて蒸気船で安価に渡航することが可能となり、アメリカに向かうアイルランド人移民は増加の一途を辿った。

アイルランドにおいて、飢饉による被害が最も大きかった1847年には、約106,000人がアメリカに向けて出国している。ただ、アイルランドから直接に、もしくはリバプールなどイギリスの港を経由して、大西洋を越えた人は、アメリカだけでなくカナダ (当時はイギリス領北アメリカ、British North America) にも多数入国している。そのうちの何割かは、そのまま国境を越え、また何割かはカナダ在住の後アメリカに入国した。

従って、カナダを経由してアメリカに入国した者を含めれば、アメリカにおけるアイルランド人移民数は、現況の1.5倍になると推定されている²⁹。

アイルランドからアメリカに移住した人々に関しては、1840年頃を境に二分される。1840年より以前には、北部のアルスター地方や東部のレンスター地方 (Leinster) 出身者が最も多く、比較的豊かな資力と比較的熟練した技能を備えていた。これは、大西洋を越えての移住に相当な費用を要したことを考えれば、当然であろう。

1840年以降には、アイルランド農村の更なる困窮や蒸気船の導入もあって、西部のコナハト地方 (Connacht) や南部のマンスター地方 (Munster) からの移民が増加している。彼らは比較的貧しく、技能的にも不熟練な者が多かったとされ、拡張を続けるアメリカにおいて、運河や鉄道などの建設現場や炭坑、鉱山、

工場などに雇用を求めた。また女性の場合、工場以外に、増加するアメリカ人中産階級家庭に家事使用人として、多数が雇用された。

1837年、アメリカは経済恐慌に陥り、その後数年間不況が続いた。この間、雇用を巡ってアイルランド人移民とアメリカ人労働者、更には移民間の対立や争いが頻発している。また、アメリカにおいて、建国以降比較的穏やかであった民族関係は、1820年代に始まり1840年代に顕著になる「移民の第2期」に至って、激変するところとなっている³⁰。

移民の第2期は、アメリカ北東部における夥しい数のアイルランド人移住者の流入によって開始された。1831-40年に約207,000人、1840年代に約780,000人のアイルランド人移民が、アメリカに入国している。そしてその大部分が、東海岸を中心に都市部に流入した。中西部には、ドイツから夥しい数の移民が入っている。

この時代のアイルランド人移民の大半が、カトリック教徒であったことが、大部分がプロテスタント教徒であったアメリカ人に不安と動揺を与えることになった。1850年代初頭には、強力かつ排他的な先住民保護主義(nativism)と外国人排斥の動きが高まり、それは、アメリカの政治にも少なからぬ影響を与えた。

*

イライザ・クックは、1838年、即ち彼女の2番目の詩集が出版された年より以前に「ノラ・マクシェイン」を書いている。生涯の大半をロンドンで過ごしたクックは、アイルランド人移民と接する機会も多く、また種々の経験をしたと思われる。

しかし当該の詩は、それが書かれた直接の動機は不明であるものの、当時の世相やクックの体験に基づくよりは、ムーア(Thomas Moore, 1779-1852)に始まるひとつの伝統の流れに沿って書かれているように思われる³¹。

ムーアは、1808-34年にダブリン(Dublin)とロンドンにおいて、『アイルランドの調べ(Irish Melodies)』全10巻を出版した。彼は、同出版によって「アイルランドとアイルランド人像」を提示し、それを確立させ、更には後代

に向けて永続化させたとされている。

『アイルランドの調べ』は、ムーアが、アイルランドの伝統的な旋律に英語の詞句を付けたものであるが、大西洋の兩岸において大きな成功を収め、以降に書かれるアイルランド歌謡に一定の方向性を与えた。彼は、その書を通して、「今は失われた過去—故国、故郷、生家、幼年時代—への郷愁(ノスタルジア)」こそが、アイルランド人の心性の根底に根ざすものであることを示したのである。

ムーアは、「曾ては栄光ある独立国であったアイルランド、そのアイルランドの美しい風景、故郷と故郷の人々、生まれ育った家と家族、楽しかった幼い日々」を、「それらが失われた今の状況」と対比させ、アイルランドの人々の心に宿る光と影、喜びと悲しみを、詞句の中に巧みに描き出した。そして、その全体を通して奏でられる調べは、懐かしい思い出、今は失われた過去への郷愁であった。

ムーアは、直観的に、アイルランド人の心の本質を見抜いていたとされる。そしてそれを、詞句の中に固定させた。彼は、アイルランドに生まれた者の宿命として、故国を出て異郷に一生を送ることを運命づけられた者の心情を歌っている—故国を、自らの意志によらずに追放された者、異郷を放浪する者の、心にあって消えることのない過去への郷愁と望郷の念。

それはまた、多くが故国を後に、新天地に夢を託した移住者であるアメリカ人の心情に通じるものでもあった。ムーアの『アイルランドの調べ』が、特にアメリカで好まれたのはその故であらう。

そして、19世紀のアメリカの、ひいてはイギリスの、アイルランド歌謡は、ムーアが提示したその概念に沿って書き継がれることになった。「ノラ・マクシェイン」も、正しくその流れに連なるもののように思われる。

ただ、その詩は、クックの詩集を離れ、ブロードサイド・バラッドやシート・ミュージックに転載されて、1840年代以降イギリスやアメリカで独り歩きを始めることになった。しかし、「ノラ・マクシェイン」が歩き始めたその時代は、前述のように、イギリスにおいてもアメリカにおいても、殊更にアイルランド人移民

に対する反感や敵意が強かった時代と重なる。

従って、アイルランド人移民の流入に否定的な人には、その詩は、「移民は、異国に来ているが、心は、故国とそこに残してきた恋人と共にある。移民は、明日にもアイルランドに帰ろうと考えている」と解釈されたであろう³²。また、アイルランド人移民の労苦に共感を寄せる人には、それは、「移住者として異国に生きる者の悲しみと辛さ、それ故の望郷の念の強さ」を改めて認識させることになったであろう。

そして、自らも海を越えて異国に入った人には、その詩は、自身の体験をそこに重ね合わせて自らの「ノラ」を思わせ、「明日命があればアイルランドに帰ろう」と誓わせたであろう。

しかし現実には、アイルランドへの帰国と再定住を果たした移民は少数であったとされる³³。その意味において、「ノラ・マクシェイン」は永遠に恋人を待ち続け、アイルランド人移民が異郷に根を張り、その地の人となるまで、時代の文脈の中で、読み継がれ歌い継がれていったと思われるのである。

以上、簡単ではあるが「ノラ・マクシェイン」について述べた。その詩はイライザ・クックによって書かれ、彼女の詩集に掲載されている。クックは、ヴィクトリア時代には詩人として相当な評価を受け、円熟期には、詩集がイギリスとアメリカで出版された。しかし今日においては、忘れられた詩人のひとりとも言える。

ただ、クックの詩には、「ノラ・マクシェイン」と同じ運命を辿った、即ち彼女の詩集を離れ、大西洋の両岸で、ブロードサイド・バラッドやシート・ミュージックとして印刷・出版されて独り歩きを始めた作品が、比較的多く見られるのは事実である。それ故、クックの詩の何編もが、「ノラ・マクシェイン」も含めて、彼女が本来読者として想定した中産階級の人々を越えて、広く社会に流布されたと思われる。

今後ブロードサイド・バラッドやシート・ミュージックの電子情報化と公開が更に進む中で、それらの領域におけるクックの作品の全体像の把握と、民衆詩人としてのクックの再評価が期待される。

[注]

1. Eliza Cookの経歴とその詩作に関しては、*Notable Women of Our Own Times* (London, 1883), pp. 138-49のEliza Cookの章に拠る。
2. Cookの出版した詩集は、以下の通りである。即ち、*Lays of a Wild Harp: a Collection of Metrical Pieces* (London, 1835); *Melaia; and Other Poems* (London, 1838); *Poems*, 4 vols. (London, 1848-53); *Poems*, a New Edition (London & New York, 1859); *Poems*, Selected and Edited by the Author (London & New York, 1861); *New Echoes and Other Poems* (London & New York, 1864); *The Poetical Works of Eliza Cook*, Complete Edition (London, 1870). 本稿においては、*Melaia; and Other Poems*, p. 77; *Poems*, a New Edition, pp. 65-66; *Poems*, Selected and Edited by the Author, p. 53; *The Poetical Works of Eliza Cook*, p. 61に掲載されている“Norah M'Shane”を参照した。
3. Cookはどのテーマに関しても、比較的多産であるが、航海者などをテーマとする作品として、“The Sailor's Grave,” “Our Sailors and Our Ships” など、アイルランド人移住者をテーマとする作品として、“Young Kathleen,” “The Poor Irish Boy” など、先住アメリカ人をテーマとする作品として、“Song of the Red Indian” など、黒人奴隷や *Uncle Tom's Cabin* をテーマとする作品として、“Eva's Farewell,” “Poor Uncle Tom,” “Little Topsy's Song” などが挙げられる。
4. Cookの作品が、イギリスやアメリカにおいて、ブロードサイド・バラッドやシート・ミュージックの版として出版された例は、後掲の Bodleian Library, University of Oxford や Library of Congress の電子情報の Eliza Cook の項の検索によっても明らかであるが、例えば Bodleian Library, University of Oxford に所蔵されているブロードサイド・バラッドにおいて、Cook の作である “The Englishman” は、重複するものもあるが 16 版を数える。
5. アイルランドやアイルランドの人々をテーマとするブロードサイド・バラッドや歌謡によく用いられるステレオタイプの表現は、それらを何編も読めば自明のところであるが、William H.A. Williams, *'Twas Only an Irishman's Dream* (Urbana & Chicago, 1996), pp. 34-48, p. 61 などを参照。
6. Williams は、前掲書 p. 222 において、20 世紀のアイルランド歌謡に描かれるアイルランド娘 (colleen) は、なおも Victoria 時代の流れを引き、純粋で、恋人

に忠実かつ誠実であるが (still pure, loyal, and faithful)、唯一の近代性として、生来の内気さ (native shyness) に、ある種の「ちゃめっ気 (roguish quality)」が加わるようになったと述べている。

7. “Norah M'Shane”のブロードサイド・バラッドの版に関して、イギリスのものは、Bodleian Library, University of Oxford の電子情報 <<http://bodley24.bodley.ox.ac.uk/cgi-bin/acwwweng/ballads/image.pl?ref>> に拠る。アメリカのものは、America Singing: Nineteenth-Century Song Sheets, Library of Congress の電子情報 <<http://memory.loc.gov/cgi-bin/query/S?ammem/amss:@field>> に拠る。シート・ミュージックの版に関して、イギリスのものは、British Library より当該の版の複写提供を受けた。

アメリカのものは、以下の電子情報に拠る。即ち、Music for the Nation: American Sheet Music, Library of Congress <<http://memory.loc.gov/cgi-bin/ampage?collId=musssm&fileName=sm2>>; Historic American Sheet Music, Duke University <<http://scriptorium.lib.duke.edu/sheetmusic>>; The Lester S. Levy Collection of Sheet Music, Milton S. Eisenhower Library, The Johns Hopkins University <<http://levy-sheetmusic.mse.jhu.edu/levyfeedback.html>>。オーストラリアのものは、以下の電子情報に拠る。即ち、Digital Collections: Music, National Library of Australia <<http://www.nla.gov.au/apps/cdview?pi=nla.mus>>。更に、活字化されたものとして、Robert L. Wright (ed.), *Irish Emigrant Ballads and Songs* (Bowling Green, Ohio, 1975), p. 406, “Norah M'Shane” を参照した。

因みに、Irish Traditional Music Archive の Ms Joan McDermott より 2006年11月6日付書簡と共に、“Norah M'Shane” が掲載されているアイルランド、イギリス、及びアメリカの文献の詳細なリストの送付を受けた。出版年代の不明のものや再版も多いが、判明し得る限りにおいて、イギリスやアメリカにおける最古の例としては、Londonで1852年に出版された Dinny Blake (ed.), *Sprig of Shillelah: A Collection of the Most Humorous and Popular Irish Songs* と、New Yorkで1863年に出版された *The Emerald: or, A Book of Irish Melodies* に、各々 “Norah M'Shane” が掲載されている。最も新しい例としては、Gale Huntington (ed.), *Sam Henry's Songs of the People* (Athens, Georgia, 1990) に当該の詩が掲載されている。

8. 以下イギリス及びアメリカのブロードサイド・バラッドに関しては、Leslie Shepard, *The Broadside Ballad* (London, 1962), Chaps. 3-4; *The History of Street Literature* (Newton Abbot, 1973), pp. 51-77. G. Malcolm Laws, Jr., *American Balladry From British Broad-sides* (Philadelphia, 1957), Chaps. I-III に拠る。
9. John Holloway and Joan Black (eds.), *Later English Broadside Ballads*, 2 vols. (London, 1975-79), Vol. 1, p. 1.
10. Jonathan Bardon, *A Shorter Illustrated History of Ulster* (Belfast, 1996), p. 201. 因みに、同頁の地図に拠れば、Ballymoneyの南に Ballymena という地名も見られる。
11. Edward MacLysaght (ed.), *The Surnames of Ireland* (Dublin, 1973), p. 370.
12. 前掲 Bodleian Library, University of Oxford の電子情報に拠れば、2806 c. 15: Mostly Irish printers; Harding B 26: Irish publishers となっている。
13. Williams, *op. cit.*, p. 23.
14. Manuscripts and Special Collections, New York State Library: Broadside Ballads Catalog の電子情報 <<http://www.nysl.nysed.gov/msscfa/broadsides.htm>> の Introduction に拠る。
15. Claude M. Simpson, *The British Broadside Ballad and Its Music* (New Brunswick, N. J., 1966), p. xv.
16. 前掲のアメリカにおけるシート・ミュージックの電子情報に加えて、University of Colorado; Lily Library, Indiana University; University of North Carolina at Chapel Hill など所蔵のコレクションを電子情報化し公開している。因みに、これらのコレクションには “Norah M'Shane” のシート・ミュージックは所蔵されていない。
17. 以下アメリカにおけるシート・ミュージックの成立過程、各時代における特色、主な作品の分析などに関しては、Williams, *op. cit.* 並びに Charles Hamm, *Yesterday: Popular Song in America*, Paperback Edition (New York & London, 1983); Jon W. Finson, *The Voices That Are Gone* (New York & Oxford, 1994) が詳細に述べており、本稿はそれらを参照している。
18. 19世紀前半にアメリカで行われ、アフリカ系アメリカ人に扮した白人によって、主にアフリカ系アメリカ人の歌や踊りが演じられた。
19. Williams, *op. cit.*, p. 33.
20. Williams, *op. cit.*, p. 31.
21. J. Blewitt 並びに W.J. Wetmore に関しては、Hamm,

- Finson, Williams の各前掲書に言及されていない。Blewitt に関しては、British Library の電子情報による蔵書カタログに、シート・ミュージックを中心に 195 項目、Wetmore に関しては、Library of Congress の前掲電子情報に、これもシート・ミュージックを中心に 29 項目検索されるが、彼らの生涯については現在のところ不明である。
22. 以下 C.E. Horn に関しては、Hamm, *op. cit.*, p. 184, 及び Finson, *op. cit.*, p. 30 に拠る。Firth, Pond & Co. に関しては、Finson, *op. cit.*, p. 195 参照。
23. W.D. Sutch に関しては、National Library of Australia にも "Norah McShane" のシート・ミュージック 2 部が所蔵されているのみである。イギリス並びにアメリカに関して、前掲の全国図書館の電子情報に加えて、Cambridge University Library, National Library of Scotland, Glasgow University Library などの電子情報化された蔵書カタログによっても検索を行ったが、該当する項目を見出せなかった。
24. 以下イギリスによるアイルランド支配に関しては、Kerby A. Miller, *Emigrants and Exiles*, Paperback Edition (New York & Oxford, 1985), pp. 11-25, 及び Bardon, *op. cit.*, Chaps. 3-5 を参照。
25. アイルランドがイギリスの支配下、経済的に困窮状態に至ったことは、アイルランドに関する研究の殆どが言及しているが、本稿においては、Miller, *ibid.*, pp. 26-101, 及び Donald M. MacRaild, *Irish Migrants in Modern Britain, 1750-1922* (London & New York, 1999), pp. 9-41 を参照した。
26. イギリスに向けてのアイルランドからの移住に関しては、MacRaild, *ibid.*, pp. 42-74, pp. 155-88, 及び Graham Davis, "The Irish in Britain, 1815-1939," in Andy Bienenberg (ed.), *The Irish Diaspora* (Harlow, 2000), pp. 19-36 を参照。
27. Victoria 時代におけるイングランドの貧困者に関しては、James Hepburn, *A Book of Scattered Leaves*, 2 vols. (London, 2000-01), Vol. 1, pp. 83-158 を参照。因みに、同書は当該頁において、当時の社会の貧困状態と貧しい人々をテーマとする種々のブロードサイド・バラッドを併せて掲載し、解説を加えている。
28. アメリカに向けてのアイルランド人の移住に関しては、Miller の前掲書は、その詳細な研究である。本稿においては、それに併せて、Donald Harman Akenson, "Irish Migration to North America, 1800-1920," in Bienenberg (ed.), *op. cit.*, pp. 111-38 を参照した。
29. Akenson, *ibid.*, p. 122.
30. Finson, *op. cit.*, pp. 284-92. Finson に拠れば、1840 年代にかけて移民及び外国人排斥の動きが高まる中で、Order of United Americans や Order of the Star Spangled Banner といった秘密結社が作られ、それらは、プロテスタント教徒候補者を政界に送り込むために活動した。そして最終的に、1850 年代初めに Know-Nothing Party が結成されるに至っている。同党は、一時期多くの代表を各州議会に送り込むことに成功した。
31. Hamm と Williams の前掲書は、Moore の *Irish Melodies* がアメリカにおけるアイルランド歌謡、特にシート・ミュージックとして出版されたものに極めて大きな影響を与え、その方向性を定めた点で一致している。即ち、Hamm, *op. cit.*, pp. 42-61; Williams, *op. cit.*, pp. 19-31. しかし、アイルランドとアイルランド人移民をテーマとするアメリカのブロードサイド・バラッド、並びに同テーマのイギリスのブロードサイド・バラッドとシート・ミュージックにおいても Moore の影響は極めて大きかったように思われる。拙稿「アイルランド望郷—アメリカ議会図書館所蔵ブロードサイド・バラッドを中心に」【研究紀要】第 43 集：県立新潟女子短期大学 (2006 年) 参照。因みに、Georges Denis Zimmermann, *Songs of Irish Rebellion*, Second Edition (Dublin, 2002), pp. 76-78 などにおいては、Moore と *Irish Melodies* が、アイルランド愛国や解放をテーマとするバラッドや歌謡に与えた影響が論じられている。
32. Finson は前掲書 p. 285 において、1840 年代に夥しい数のアイルランド人カトリック教徒移民がアメリカ北東部に流入するに至ったことが、大半がプロテスタント教徒である地元アメリカ人社会に不安と動揺を与え、そのため、アイルランド人移民をテーマとする歌謡に「過渡期的な歌謡 (a species of transitional songs)」が生み出されたと述べている。Finson は、そういった歌謡においては、「移民」が「移住地に来てはいるが、心は強く故国と結ばれている」即ち「移民」は「いつか故国に帰ることを望んでいる」という形で詞句が提示されるとして、"Norah M' Shane" を、そういった歌謡の 1 例として挙げている。更に、p. 287 において、アイルランド人移民に関する過渡期的見解は南北戦争の頃大流行したとしている。
33. Kevin Kenny (ed.), *New Directions in Irish-American History* (Madison, Wisconsin & London, 2003), p. 245

に拠れば、20世紀への変わり目において、アメリカからアイルランドに帰国・再定住を果たした者は、全アイルランド人移民の10%以下に過ぎなかった。対して、イタリアや東ヨーロッパ諸国からアメリカに移住した者は、同年代にその50%以上が故国に帰っている。